

衝撃の息子

廊下に食べ終わったものが出ていた。引きこもっていてもお腹は空くよ
うだ。私は二階に上がってきて、それを片付けるのが毎日のルーティーン
になっていた。それを下げるときの虚しさといったらない。一日三食、朝
昼晩とそれを持って二階に上がらなければならないのだ。面倒くさいとい
う段階はとつくに超えていた。

どれぐらいこんな生活が続いているのだろうか？ 私は本当に心身ともに

疲れ切っていた。自分でもよく我慢していると思う。息子の智が引きこも

りを始めてから半年近くが経っている。

息子といっても実の息子ではないのだ。私は一年前に、四〇歳で結婚し

て家庭を持った。夫の和弘は四十五歳で会社を仕切っており、何不自由な

かずひろ

い生活が保障されていたのだ。それが私が夫を選んだ最大の理由だったが、こんなはずじゃなかった――。

智はその夫の連れ子だった。最初はいつも笑顔を向けてくれる本当に優しく、良い子だったのだ。笑うととても可愛い。私は、この子となら上手くやっていけると思って、和弘との結婚に踏み切ったのだった。

結婚当初は順風満帆だった。一戸建てを購入して、家族三人で暮らし、夫はとても優しく、智も真面目な子だった。彼は私たちの結婚とほぼ同時に就職して、毎日元氣よく会社に通っていたのだ。彼は現在二十二歳だ。

ところが会社で先輩社員に辛く当たられたことがショックで辞めてしまったのだ。その先輩が会社の金を横領し、その罪を智になすりつけられたのだ。

結果的はその先輩がやったことが発覚して、警察に逮捕されたのだが、智はそのことで深く傷ついており、立ち直れなくなってしまった。あの子があんなに繊細な子だとは思ひもしなかった。落ち込んだ心は、そのうち立ち直るだろうと思って軽視していた。でもそうじゃなかった。

智は「もう働くのは嫌だ」とごね始め、一日中部屋に閉じこもるようになってしまったのだ。私はそれを二、三日のことだろうと甘く考えていた。すぐにまた就職活動をするのだろうと思っていたが、彼の心の傷は思いのほか深く、いっこうに就活する気配は見られなかった。

そんな状態があつという間に一か月続いた。私はどう対処していいのか

困り果てた。この結婚は幸せになるはずだったのだ。まさか、こんな引きこもり息子の世話をすることになるなんて想像もしなかった。

実家の母に相談したら「すぐに離婚しなさい」と言われた。「あとは弁護士を立てればいいから、すぐに帰ってきなさい」と言ってくれたのだ。しかし私は離婚に踏み切ることなどできなかった。智を放って、この家を出て行くことなどできなかったのだ。

夫も息子には手を焼いていた。決して何もしないわけではない。和弘も親身になって私の話を聞いてくれたが、彼には会社の仕事がある。会社の方もないがしろにしてほしくはなかった。こんな状態で倒産でもしようものなら火に油だ。それこそ本当に離婚を考えなければならぬ。

一日家にいるのは私なので、私が何とかしなければと、自分で自分に言い聞かせた。

「佐和子、こんなことになってしまつて申し訳ない……」